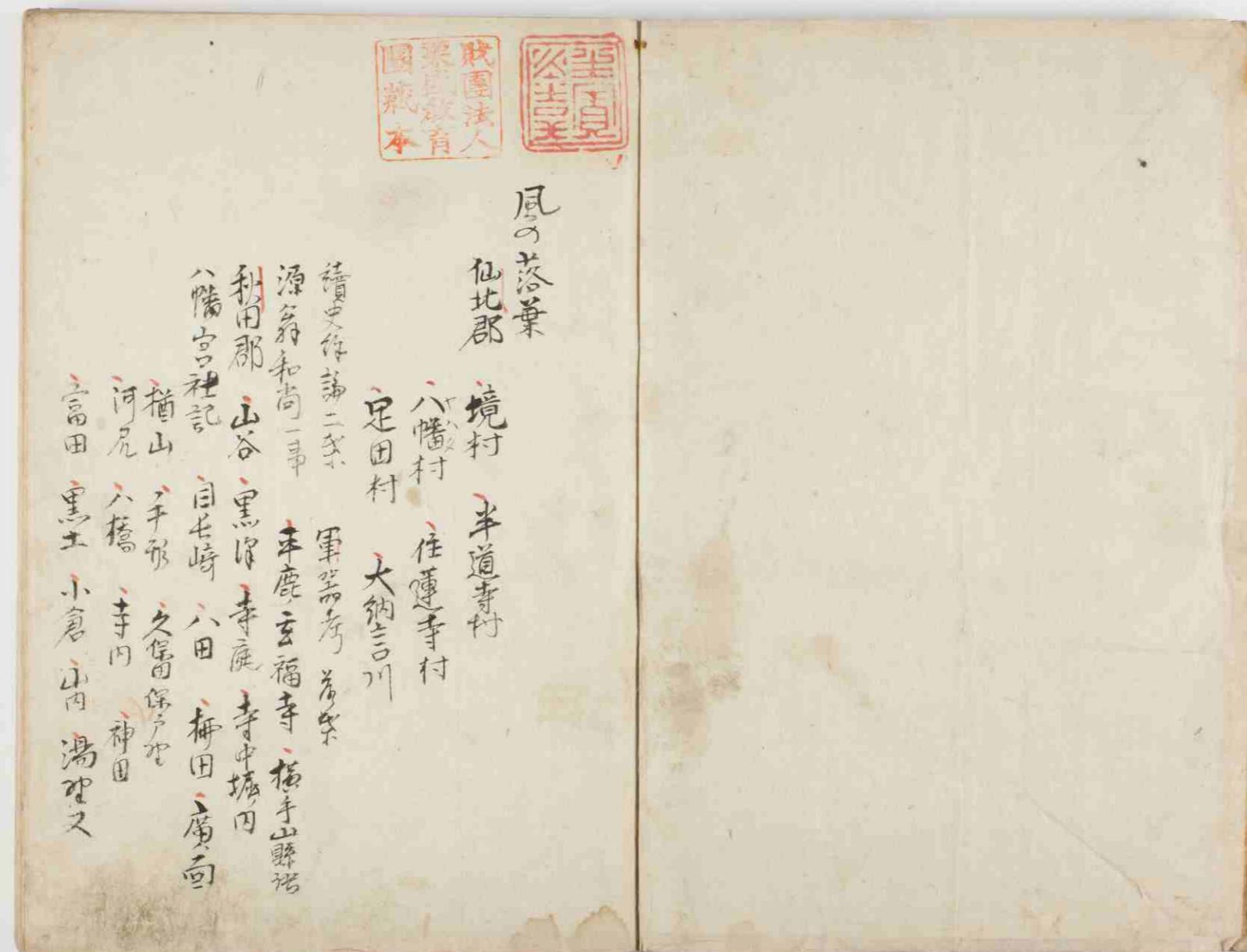


破損あり

以下 汚れあり





○ 浅見田 中津又 沖田面

○ 南北角 獨鉢村

○ 諸紀一毫一糸考

三河國 生田村

○ 秋田郡 中北庄 大戸村 磐勝郡 八幡

大川 今戸 磐勝村 一日市

佐原

○ 藩百石 小笠寺系譜

仙井小笠寺主より毛賀の毛彦子

○ 境村 仙北郡古名

此鄉慶安秉應年すて山本郡也。寛文四年夏四月仙北郡中北
村に古雄勝平處山本三郡山北とひし山之仙福を字も書於
其事序小笠村之世色はあれども郡邑記云邑河邊郡舟岡
村境今月野川谷澤水落街道橋限と見え下境塙を有す。其
事をもく塙手引うすもえつれし姓氏銀小坂合部達太彦命
後也允茶天皇御世造立國境之標因賜姓坂合部達太彦命
塙を坂合の字もしくとづく

○ 仙北郡 境村

七
半道寺

第一幸あらうほしの寺の號と、近江國木口邊下、飯道寺少主天合
家、寺號秉應道名所圖會二卷云、遐齡山飯道寺、松樹南一里にあり、三天
合、宗日光御門時、居次
本社 飯道權現、延喜式神名據云、飯道神社云々、飯道寺少主
也。參、飯道神の事記、記中略云、飯道神乃足乞不、○郡邑記云
家負捨軒内、軒寺内、軒山伏、大野村、三新霍谷地村、二軒、某町村、五軒
間、明田村七軒、黒原村七軒、大谷地村二軒、向黑印外、鳥海佛供田、
多名之有、世記六御枝村見たり。

仙北郡志

○八幡村

（とく舊ニ八幡のゆゑのものあり。義家、増軍、東夷、征伐、給与を
神小祈して、横刀をもて手劍を贈ひ。近江世木事。白子河内守
藤原文平、世積二千斛の神田を奉拂られ。正徳三年奉加帳あり。
別當和光坊とあり。今之別當と云ふ大久保村の華藏院有。かゝる地
町社のうち、村を西御名小字とし。本社北小舊社地あり。名石
を白子と刻す。今金宮の有る地城回り。其北は古城の跡也。その
名を文平とす。

- 白子川の、あら貝、螺貝の、河鹿裏、河鹿裏、三島地、小河の、廢物有。
- 京塚、神明宮、八幡村より、京東、枝村。
- 白子山、應現寺、普門院、平鹿郡猪田郷の、古名真言して今、禪林と称す。
寺開祖、滿福寺、七玄的高、近在天文十五年頃、普門山慈眼寺

山號ヤマノニメさき号サキヲも改ハシメり、十九世當住、怡峯和尚イフウノハサウエイ、白子向内守藤原文平ホシタカヒコ、木門寺キムジ、珠月院殿スミツクノミコト、應宗耕大居士ヨウジウノカズルと号ハシメり、

妙寺の鎮守の神ミヤツノジンジと、○白子稻荷神社ホシタカタケラノミコトノミコトある。

○天真了翁和尚テイジンノリヤウノハサウエイを冊付シラフ手生れハヂメ、批ハサフのものモノをちこちこチコチコし、
出家ヘアツしてから、金戒圓キンケイエンの人ヒトを施ハセす事モノ、記念録シメイロクに記メモす。
黄檗ヨウベツ開山國師傳カイサンノクシノモン云クモ、天真院山門の南ミナミの野のはらハラに在リ、天真院テイジンノイニ、黃
檗ヨウベツ第五代賜紫高泉和尚テイシテイシノコウスンノハサウエイ法子ハサウエイノコ、本朝出羽人ヒタチノヒト、羽道覺ヒタチノヒト、
元祿七年甲戌カウシキ六月ロクガツ、を開基ハケイキして、塔タツを伍居ウイし、伽藍カレンを修メス、
佛塔ボダツを多ハめハ、人ヒトをもハ、佛事ボダツモノをハ、學ハセらハセラ、○自得院ジドクノイニ、
此院シノイニ、天真了翁和尚元祿十一年カウシキジツイツ小建立コジクニ、二年ツイツ已ヨリ甲カウ十二百韻ツイツヒツ日ヒ、
天真院テイジンノイニと名メイれて、室ムロを隱居ヒヅキ、
慈福院シフクノイニ、裡ミシマ門モンの向モチ右ヨリの室ムロ、
黄檗二代木菴和尚の法子ハサウエイノコ、どうこうの僧院ソウイニ、山道宗和尚サンドウゾウノハサウエイの開基ハケイキ、

○瑞光院セイコウノイニ、黃檗二代賜紫千呆性安和尚ヨウベツノカウシキシキノハサウエイ、其前是シテと草創ハサウエイあり、
本師即非智高の舍利ハリをあハて、瑞光院と号ハシメし、館カニ、千呆和尚チバノハサウエイ、長
崎ナガシ崇福寺スウボクノシ、位位ヒヒ、坐シテ也ハ、
○八陽村ハヨウノシの字シメ、紫倉シラタケ、鶴巣ツバキ、館腰カニヒ、白子ホシタカ、豐嶋トヨシマ、
欠ハタク、幸神カムカミ、木馬キバ、

枝鄉ハグロ、○高屋敷村タカヤシマノシ

○鍛冶屋敷村タニヤシマノシ

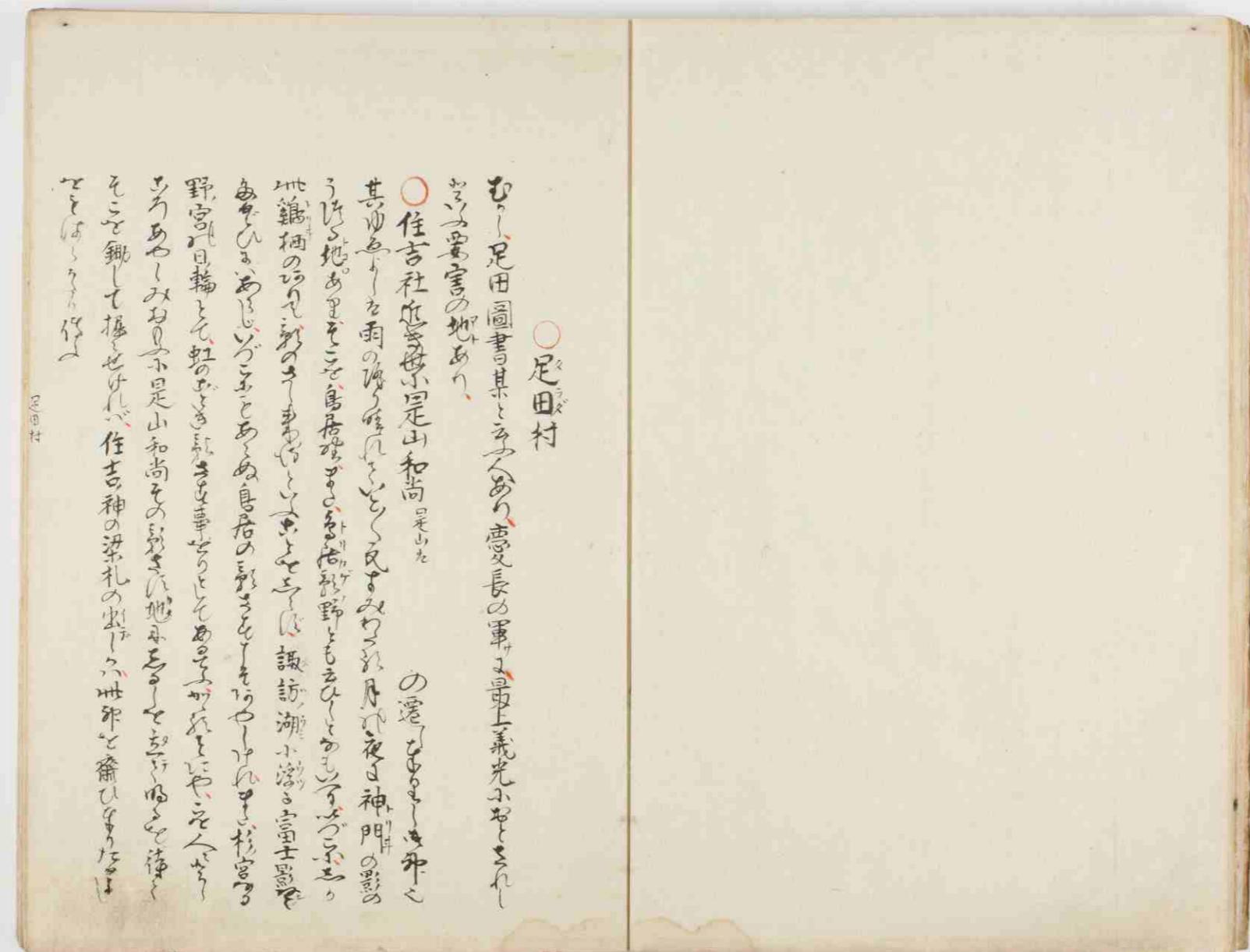
○上荒廬村カミハラヌマ、毫齋ヨシザイ、又高村タカシマ、○神明宮ジンメイノミコトノミコト

○京塚村キョウツカ、神明宮ジンメイノミコトノミコト、并ハシメ前ハシメも記メモす

○下荒廬シタハラヌマ、幡宮ハタハコノミコトの南ミナミ在リし、今ハシメ之ミツ村ムロ、田タラの富附ハタハタ也ハ

○住蓮寺村

住蓮寺、高松庄、在りし古義の真言宗、寺と云ふ。其
寺、その材跡、烟とあひて石努^{アシカ}、一毛石努^{アシカ}、捨^{スル}ま
る。古碑記^{アリ}、歴^{アリ}、有^リ、墓碑^{アリ}、ども、冊寺^{アリ}、十蓮寺^モ、書^ク、清然上人
の弟子^モ、十蓮坊^{トシ}、僧^モ、近江國守^モ、馬開^モ、十蓮法
師^モ、源^モ、木曾路石所圖會^モ、近江條^モ、十蓮坊塚^モ、右の森^モ、中^モ、安
法^モ、死^モ、人^モ、洛東鹿谷^モ、後島羽院^モ、后妃二人^モ、十蓮坊
安樂坊^モ、弟子^モ、尼^モ、成^モ、罪^モ、行^モ、安樂坊^モ、橘州無^モ、唐小^モ、橘州名所圖會^モ、寺^モ、
寺^モ、十蓮寺^モ、也^モ、住蓮寺^モ、也^モ。



○多良田池 池を有する山々の高志山中より出る草の方言
仙北舊記とすの平蓋英かぬる事とあり
山の端より日の葉や花の段 ある事あり
上を福田原と云ひ下を次條原と云ひ中を鷲原と云ひ
下を長者森 ○大谷池 小瀧 一雲と云ふの句
冬枯やむつゝも花の香者半林

○大納言川

陸奥國村山郡金山郷羽長坊が櫻木に仙北舊跡記目録西云
小町坂院内銀山、烏帽子山、貝澤岩、院内行福寺、八呂木葉石、清涼寺、
關石山、八幡館、猿橋、高松天狗橋、駒之齋、小安不動、瀧龍光、柳田古城、早畠
院内岩井川、鹿通石湯、湯治古城、御物川、花見沢石壁、梅花城、金龍山、
東島山、清老庵、水鉢井、燕橋、蘆僧松、御嶽山、桜名山、山屋跡、
水瀬川、稻荷山、松園、金峯山、真人山、切高山、假館、藏光院、河原毛温泉、
五把出下有河内池、守城、栗棘庵、移堂、大金屋舗、床舞、東向寺、大戸川、
河童、足田佐吉社、御嶽山、足田堤、長者森、大納言川、大森吉城、大慈寺、
沼館古城、横手蛇崎橋、御嶽、岩磯古城、地縄裏、天明八年戊申春立
そがみの木大納言河口を有す

地名考

● 真野

江源武鑑云佐木七代嫡領經方二男行定元祖也
後寺舟木又間宮皆真野庶流也

世系真野之地多中之舟木村

● 加地

同書云嫡領秀義三男盛經元祖也
破部東鄉倉田鮑浦當地原流

● 郡木

同書云九代嫡領秀義
四男高健元祖也

中和子不中野木端多どを稱す

● 吉田

同書云同九代嫡領秀義二男
葛秀元祖也

● 万木

同書云同十代嫡領定相男廣健元祖
萬木葛田万木彦流也

世系木真木間木命とあるも多し

○讀史餘論上後醍醐帝中興御政務事
建武二年春三月西園寺大納言公宗謀及企
謀等謀反五月廿一日出羽國住人某國司葉室宰相
光頭を殺名越太郎時兼北國守起而相謀源節時行
信濃國守勢利、鎌倉小室直義子ひび軍勢利を
敵攻ぐる成良親王と伴ひ參り七月廿日鎌倉出
八日音前守民守徒退治のあたる京正統記云建武乙亥
秋の日高時之類謀反と起鎌倉守直義成良
親王を引連れやし三河國守と云ふ事、前守氏中掌
依り東國不向ひける征夷將軍并諸國總追補使
望け其征夷將軍に於て流れてゆくゆく太平
記より征夷將軍元束八國の管領を望む征夷將軍

○板田 同上第十五代嫡孫比類三勇士氏高元祖
多賀貝板田高麗也
出羽守源也多
○種村 同上第十六代嫡孫政穆三男高成元祖
和田種村高麗也
種村出羽板田高麗也種村守奥壁種井村千外家
同上第十九代嫡孫高賴三男高保
改姓大須氏高麗也

○大曾 同上第十五代嫡孫良義四男信高元祖
大曾原山城守也出羽板田高麗也

○高官 同上第十五代嫡孫良義四男信高元祖
高官守也
高官守也

近江國守源也多

關東靜謐の功尔を當信し、管領事の名を於是のま
ま御譯の字を了す。
梅松譯不關東令義の父を京都にまづ小佐と將軍
山米朝方の直承官が多き所故にさ知略をもて
之を傳通不引退くに其間を度むべく時後つて會
せばその会あら度く所及とぞも御譯をもれ詮
和よりて天下のあひあひ由やすと八月三日於吉田
六世頃公家と至りて今子數多る也。本役の
肩を用ひて忠信やけり。三回の失脚をして京錦の兩大將
少尉高富の關東守布宣を免れ、遣呼舊不依舊中山
殿向の高橋銀子、梅根後川岸原川より、鑑金屋玉を
七萬枚余りも拂て八月十九日歸京(改入院)。遂にく
國書

甲同書云年川貞世難太平記。而一家の置み手代や代福子
生れは天をうかしと仰ぐれど云々。又曰、元弘の年下
洛のとひ不思議事ありけり。三河國八條川止宿。有才人
姓のタキ白衣ろき多才人ありて西山孫重事あらず。
在守りやべし。其證おとこを毎度合戦出陣は風雨どりて
市中立じまう。夢狀如くうそけり。未だして云々と
も謀反のものか。一にて上杉無庫たかきぬ。左無庫武寅房
をも候とぞ先づ吉良上總禪明願尔位。合はしもとと及
事害をもててかわくともかかへつて。此事事關東守の事
時ち内に上杉兵庫入をやつめ。ナモ慶時貞氏。此而
の由造意等よしとぞ。此人肯と折り。酒肴合被
主客對酌。其後梅松譯保廢聞記をも却參

閻錫山の軍は民衆陽江に従三位昇り參議官を充
三子園の守護を務めつゝも三子園實向に任んではあるま

本朝軍器考五卷。石口之辨。夫吾邦石口の紀事
推古帝の平寧陵隨拂帝平南の意津し高麗を征し
珍よ高麗の軍とて敗きて隋軍敗走せり。今年秋高麗
王被擒て吾故主被縛。俘虜二天、鼓吹奴弓拵石等の物を
献ぬ。此異國史に見之。初之以之源將軍義家が降國前
後三年の征戰より其物事角く外と云ふの、また近世より
機械の利害して知る。古今事記も多き。其名も多き。

○大砲ヲ辨。金華大砲と云ひ。天正五年の夏太友宗麟(通
鎮)が肥後國高麗(うら)の大石火矢來れど國崩と名づけ
秘藏せらる。又天文七年南番の高船來れど石矣
と云ふ。鐵砲の如き、物牛ツヒ宗麟(通鎮)が進むせり。九世記
有す。思ひ異なり黑潮より來る。佛郎機(フランキ)の創作す。ヨリ

太前之舞 近代太前と争ひ用ひ古へるを以て今
内海火矢、鎌田火矢など品多くあり、銃羽ア仕懸ウリア、
火薙、薙の調合等も多く流傳考有り、又石火矢、土臺等も調
観入、時見の傳達也と定め男々設て其利用多し。
壽永二年正月、清住寺殿合戰、今井郡兼平ノ射了レ
火前御所の櫓ヲ落シて火の元上リ官兵多シ敗北せシ。又近
鳴鑼の弾丸を入れて射了レシ。凡大術、其品多く或リを以て
射そり、火薙を用ひ取れど云々

姫子馬之親、姫子の計で方保由美と毛又令石を乞ひて、
謀す而夕奈一冊丸遂く神功皇后の制作と號す。中古隆
奥出外壹岐對馬長門因幡伯耆出雲石見等の近要
地小督師と置いて常、教習了の餘はと見え難き後代共

制を失って手を黒二枚の駒小僧の作也」と云

鳥嘴鎌之圓式鐵砍之圓式佛頭鎌之圓式

同書末卷中曾額下京田の制三枚青玉板賣四方合八百白
片白軍白龍頭獅子頭鉢形補丁青田帽子曾額と海の字
物考見之に今之制も大なり古之制より附れ唯今之與考之の物也
古事記傳、左言上云、三枝角、三枝角と云ひ五枝角と云五枝角と
謂ふ上云之形も特小大ナリシテ今世之大鎧頭オホミシ小鎧頭コトニシ也
古之制乎亦莫く四方白八方白也と云之鐵頭銀入白鎧と漢き
極て前後左右四所すうて四方白と云ハ所云うて八方白と云
一方子うつと片白と云是白入白軍等と云甚其量の軍へ結頭軍日
支之物後三年の義日ハ惟殿は定めハ故の因日也始りゆく
保元の時義朝の為され一歩強の由ゆるはく
此物之詳考主事、鑑定者也云一歩強也
首齊の蘭陵王と云せり

破損あり

鉢の面見方を以て金塘城下に敵をうち多す。鉢印子。甲冑直
鉢真を用ひ候之時、^ノ伏見敵兵攻めたり。面と筆傳
事は本終す。其筆傳は近ノイリ。今も差し陵王の筆傳也。
其面の類子。金筋と傳へ。我故に名ふ。有る處では
曾作り出。多き。又之をうへて筆馬ある所の金物の中
陵王の物が御てあり。獅子頭の冒と事元弘建造の後、
字を春日の本落議屋示あ。前物。其代の物と見え。不
是。雲朝の笠。小か。物あれ。亦做の。も。事外の御。盛の。も。賜
津を。贈甲。贈。ナリ。披曉。袖。ナリ。あ。む。あ。ち。此物の形と。ちと
鍔。四天王の像の鍔の前。河伯面。多。事物。つま。其制。
此は近代。志加美の由日。より。事物。景。遺制。と思。志加
美。之。物。鬼津。贈。と。事。鬼の面。志。許。賣。と。手。べき。と。や。

詠ひ。伊井冊尊。神道。伊井語。
尊。黄泉國。追。往。行。ひ。が。國。を。も。こ。れ。さ。と。あ。き。國。を。り。そ
逃。回。取。り。往。と。云。腕。せ。う。そ。く。中。も。そ。じ。き。名。が。り
は。れ。立。の。由。の。飾。え。せ。と。う。の。れ。れ。れ。と。う。そ。う。し
眼。眦。と。う。殺。と。争。石。好。む。器。と。刀。上。を。飾。と。龍。吹。足。と
少。す。事。あ。れ。ば。幕。裏。黒。窮。す。づ。る。儀。と。あ。い。ほ。と。う。獅。頭。
の。田。日。と。と。す。と。ひ。と。う。高。か。良。と。と。高。す。み。と。う。外。す。と。
と。よ。五。と。今。た。つ。と。高。か。良。と。と。高。す。み。と。う。外。す。と。
頭。の。毛。の。角。の。妙。か。良。や。か。と。め。ひ。唐。冒。と。う。の。厚。率。盛。裏。
記。と。え。れ。ど。其。制。と。う。か。と。め。ひ。唐。冒。と。う。の。厚。率。盛。裏。
勿。勿。圓。の。鉢。小。鍔。の。う。り。の。多く。下。部。の。若。着。る。そ
う。世。第。や。素。物。を。ひ。畠。六。席。左。扇。時。能。帽。子。曾。て。鍔。

着て足輕手出立へるどり事太平にて見下す、應仁の起兵之後
あじ小風堂の古くも多えど、今も又世よ見えても、高麗の
古の留制今ま椎形又はアコ外形などの類多く、
手足の真中へ在る穴で、其處にシカジキを飾られ
やうな事はほんと、今寶形の形をも中もしくせし
物置も其手の腰をも勇めら形をも一體を金物
ぞうは是と云ふと云ひ三枚手前、五枚手前
の布腰廻りの物、今やも布と手の腰了ともあれば
人前腰と云ふ所、後は逸聞を西うす、鐘の腰と云
如腰と云ふ腰病の物かされど腰の腰の腰の腰の腰
云々筒をと云ふ又胴毛と云ふ胴を云々形の丸ノ体の圓
体の圓が云々下學集より詩序より春日社本談議有る

在兵備正成の鐘を以て身の腰に制く、黒革威儀と呼ぶ
事、其物を加へば馬の方をあれば腰を用ひて及ば革
腰とハ枚と障子板腰と革のと、梅檀板と杏葉と以て代す
袖の腰と大袖の腰と同様の腰骨小鉢形をカツモニ金腰と云
いと指皮腰と革の腰と云ふと今之鐘の角を金腰と
云ふ制をもと作ゆて、今之腰骨の腰の腰の腰の腰の腰
腰の腰と其制をもとめ

○由の制を定め異様の物とも多く出来てからぐく多き事
あひ甚き事もあり又古ふ多き事の今之母と八幡社と云
弘仁禪師を見元し神宿と号ひゆすをあつて也
竹よ神事と云ふ事、蘿杖馬子扇林物都弓削守屋
庵と號しれ厩戸皇来髪放額して馬子扇林の

後玉頭の飾りが白膠ホウロウのあざとせんなりて佛小四天王の像在す。傳
髮を置く故玉勝タケルにては故也。必護世四天王為小軍勝を
畫く事あるを以て折言ひ。故ひしゆ小馬等軍勝を勝す。傳
御つり也。而其御願と云ふ事。今之楊津國在。四天王寺
是これ。由日の頭上。被四天王の像と置け。又多れい甚少也。六
名林也。由日之四天王等。事の何れも亦白膠ホウロウある。勝軍本と
有る凡器小用等。すこし有る。不有る。ゆゑに。傳也。云こそ。是
御願と云ふ事。而と云ひ。所命也。又云。

○衛士朝服會集。日、御新林額。挂甲カツヨウを以て。則之
而林額とす。ものとあり。鉢巻と首のうきをあらし。宗高が
紅梅の林巻カシマ。と云ふ。古の儀色存する。世の御新の
色と用ひ。御うちの制カニシキを定む。

○源翁和尚一事

信濃三才圖會地部。陸東國大寧寺。在會津若松禪宗寺鎮
開基源翁禪師。境内有溫湯。護濟山示現寺。在大寧寺三
北。真言宗舊當素初弘法大師開基石五峯山慈眼寺。蓋五峯
森列而在半半觀音像也。後源翁禪師遊此愛山景。有欲投老於此
之志。河内守平盛次寄岩崎庄若干。或爲寺領。晚至到鎌
倉見韓長大覺禪。宋寃。臨濟派之。因營海藏寺於扇谷。
居之復歸示現寺。已住雷寺。治二十六年。弘安三年正月七日寂。門
徒。骨放山之坤隅。後天正多勃謐源翁禪師。一掛鍤倉志所載。出
萬葉源翁傳。甚詳。先室殺生原筆之行狀。即下節同。蓋虎闖之釋書。
高泉之僧實傳所載。彼此有筆紀異同。但遷化為永和七年正
七日者不然也。

○錦塗 在南都鎮内

相傳古者他土人風俗慕女用尺許木彩色謂之錦木立于女家門如得嘉則取之否則難^精數千不收^之

錦木多有種種色者其木亦有布有絲有絹等

狹布里 在南都鎮內織出細繩如絲絕無

小鷄池 在行方郡 其地沼澤多下集不敢望入

此水有鷄子生其間故名也

○山羽國部

權現宮 在平度縣古田村社頭平石

鳥山權現 在平度山 村外未詳恐賞太師始蓋^之也
隆興記云每東太師賴時自稱每部將軍押領奧羽二州有

有四男一女嫡子三男目二男棄東太師良宗三男厨川次即位

四男良成郎三郎宗住云々

東邊俱被國郡花開山^ノ天音^ノ北吉^ノ赤^ノ奉^ノ奉^ノ
白龍^ノ赤^ノ西東太師阿信良宗の亡魂で守る神事
賴時曰々賴良と字號子曰賴義^ノ而^ノ改名^ノして
改名後第^ノ字號^ノ未^ノ詳^ノ未^ノ詳^ノ良宗^ノ未^ノ詳^ノ外^ノ
始音聲^ノ未^ノ詳^ノ未^ノ詳^ノ未^ノ詳^ノ未^ノ詳^ノ未^ノ詳^ノ未^ノ詳^ノ
化^ノ以^ノ又^ノ三^ノ伊^ノト^ノ不^ノ良^ノ宗^ノ未^ノ詳^ノ未^ノ詳^ノ
入^ノ之^ノ輕^ノ上^ノ以^ノ有^ノ北^ノ神^ノ子^ノ日^ノ露^ノ日^ノ氣^ノ未^ノ詳^ノ

仙北郡金澤の厨川^ノ南郡久顏^ノ所^ノ厨^ノ川^ノ未^ノ詳^ノ
弘三郎鋪食^ノ持五郎^ノ在^ノ未^ノ詳^ノ未^ノ詳^ノ未^ノ詳^ノ
儀^ノ三^ノ國^ノ令^ノ守^ノ御^ノ勾^ノ山^ノ權現^ノ在^ノ山^ノ神^ノ寺^ノ未^ノ詳^ノ
至^ノ卷大所^ノ所^ノ未^ノ詳^ノ舊有社俗傳曰唐^ノ彌^ノ三郎靈祠也有

川鎌倉五郎景政與妻阿弥三郎義被射左眼放答矢射
殺敵拔鎌到川後眼失之他川有黃額魚一眼則死

萬福寺 在蒲田 本破寺派院家

安國寺 在同上 同上

長光寺 在本居 同上

立石寺 在最上 法華 東經二百七十石

吉川土產 二歲初向狗脊草 木子枝 鈎

○平鹿、多福寺

里甜鎮行三條一毛 **平鹿** 海音村 **多福寺** 廣
寺の住職水土銀と著る國事の經濟曲刑り
往々井田の事よりとて班固司馬昭も點定の如く
高令を書き其事より是宣政の間の此僧ア 座す
引ひて若狭の事と例ひの如きア 全田口を開け
あやま初の御心とゆき

○**芦山** **山縣**

俗名
山形信玄門

修善寺縣子瑞老人送み譚の顔あり其中、
圓那云或の七日未だ土停の返す放棄し終ふと
主を即し在舊直あるとゆき難いと云ふと極度に
鉢脱てそれへ金の韁に首とのれ繩の絆引うけて

事體を傳へけり是の篇前より家事よりの後
少子聖年未都より對ひ新井體のゆき處
流あらずたゞかく終の去年七月廿九日刻をもつ
國評書局より御承認を蒙りてはと傳へけ共
始て名の有る也附其後のコト多不有事也其事之狀
因り來の刻どうに傳ひてし傳よ三言中の方を以單く
と其後を承り

山谷村

支鄉四月內土佐甚主野田
社地有平山縣權現別當名保田

社地左平縣確現

別當之保曰保祐本來謹

支那四國土佐其國
社地左平山縣權現 別當名保田保元本多源
上日(日後日)
觀音社主 伊勢二社 勝平大神山宮
境有存軍神之三多甲曾十七騎馬上優等

境內存軍械之多，用

昌十七騎馬上復有
戸村十太夫民神と云

古城利井右近將監廣忠大江九部立節大軍居不
古柵多之 築田新助“利井家”家主一 武器
等々

○黒海村 山谷ヨリ一里西

支那

稻荷社

基主官地

二村

古城館越之町
嵯峨尾張守主の城を西
馬井家臣まつ子孫有り
嘉永年より古書藏書
多有りし。官政寅年大改めす
一名刀有りしり
事多拂

○寺庭 黒原五十西

阿彌陀堂圓仁佐万圓山園居再興へまつ

○幸牛塙内村 ちより本室西
支那 川魚 下館 木宿 平形 宮原
村力

若宮八幡社 大年古城主永井彦忠二代以前右左衛
門應永年中錦倉八幡宮ノノケモ御
月十日年ノ奉祀子姫馬あり子孫モ今や
鶴君より雲慶モう傳。獵子鷹ノ弓も御
天山年中御宿實季と不和有り。実季年七母モ引
て謀る。彦忠機で擇ひゆく。擇子十才寺尾道
伝之仙北郡刈稻野塙の間、岑の立派の下木を取
六郷無事萬道の旗手を御譲り實季仙北の地を
祀る。然恨みあつた。一旦彦忠子が死り、
廣忠入。彦忠子親子色あらざり其様も和む。
水井被田の兩家子少しき從兄弟のそうちを
義通是とほとも魯庫往來知せめて永井臣也と

秋田民ノ傳ノ一子仙鶴丸を冥示シ許道レシ
 實季三春ニ至ルトモ廣忠ノ子仙鶴大江たる事
 ノ体テ三春ノ才と云。而萬國ノ事て當其時也。ト
 土祐内ヒタル指微也石と詮ノ字四石。松用多事
 ト。古不石櫻教丁方テ古社ノ別者。山伏。岸昌院。海門
 伊勢社。本原寺。御室宇松琴。林龜寺。御室宇松琴。
 正佐弓。日宗耕泉。三十吉。馬場市之進。社宣
 宗井。而立。トヨシ。彦忠。小出紳の者。トモ
 畠原。古町。少曾田。井園。

○因長崎村塙内も丁酉
 夫鄉。古町。少曾田。井園。

三十吉文作

源四里寺。補記。正壽。辛上。元美寺。真。寶。定。舊。

○田付日長島。三十吉

葛郷。關口。牛津。二部。木曾石。

西應寺。補記。まき。

古佐寺。御室宇松琴。

三都村。ひく。三都村。古羅。飯島。田坊。長島。
 久保田。植屋。草加。東家。寺。三都の内
 一部。と。り。名字。と。り。一部。長。在。門。し。勝。子。跡。
 村の名を。二都。と。ゆ。じ。つ。く。二都。川。と。よ。ゆ。す。
 勝。房。よ。古。流。と。し。古。御。の。二都。村。八。田。山。東。と。
 二都。川。と。よ。ゆ。す。西。山。勝。と。左。手。山。東。と。

大寶院。尾山伏。

○桶田村 八田
八田七字など大半の内
社地 伊勢 不知 有三社
古坂 村上 五百人 百姓の因 錦田 岐岐
左多の古坂の氏族と云

支鄉 赤沼 谷内 佐渡 桶田 二屋打
御住原 世打 皋月 月日凡十三四ヶ村

○廣面打 桶田 一丁
支鄉 富士山 紗田 二丁

○子形村 同上
支鄉 田中 畜 畜 畜 畜 大原 小原

○名傳傳子村

○川尾村

川尾村 河毛村 桐生村 畠山村 桃之森
村下有支鄉と云
支鄉里門町 七町 中町

○八橋 律橋
律橋所 保母所 保母所

今分橋 今分所 保母所 保母所
天保元年有 一有者
山王 四川の保母所 伊勢兩室 大防天和著

釋天 令申 十王 外十社
 寿昌天祖 天國主 不羣天主
 高靈堂司主
 諸命主

全良寺

院清宗院江良吉

主

主

主

鉄炮口善主傳大角少面二千手
 善主傳川村主白羅形の妙主

青

高御

壹國

田中

主

支那 萩園 ○六井村
 支那 萩園 田中 新田 ○
 支那 萩園 宮家家家士 八柳七大夫
 ○神田村
 支那 櫻花村人主句 天和元年正月

富田村

馬場目より重井山山根紫荷現坂鼻招坂
通也あり
社地伊豆櫻現神而宮
新羅王宮山村城
辛女正ニ安方靈を齋中ニ來サヘシ愛愛ニ安方アリ
妻江安心
アリミ殺ミシ喜無事モ犯ミ出テリトモモ衆人謀トシ御ニ
タニ鷹王ニ子ナニエト山と富田一村ナリ古城而村等
てカケ空山ニ富田山也ナリ天昌寺天徳寺又信
古城山内と富田西行の後山ニ有リ是傳也其孫左兵衛
吉の居候る所也山未妙正之右臣と云ひも云ひ
かくは名前の中にはう傳也其孫也妙正以都人
主ニ希セニ直モ計ケ我ノ所モトシ

本居宣室

○黒土村

本居社

幸那移良村ハシナ長良トモ各地食馬根モ半子
郡境ニ温泉水アリ涌出湯 游焉ト

小倉ノリナ丁東山内ナリ

○小倉村

黒土ナニ丁東山内ナリ

○山内村 山田

支御ムカシ
村 中嶋 荒田 和田 門前 山根
社地 神明宮社 大宮權現 備宮 真山權現

觀音

妙法

七社之

圓通寺

山内米女頭音提寺

松前

法懇寺

牛山寺

保寛六郎云 山内音提ナリモ山内米正尼 村音提

舊實事モ 滌多李二乱のと紀米頭 友季二
味也 友季既負了生害モ 善近隣也 李前進
村前の町家小窓石次時木松前寺タ 横手子近四郎
子幸也 今保三備六弟女以屋子也家也 信孝子
當也 不知其事也 信孝子前の事也 信孝子
告シ 事既白 我漂泊して居事不報も子幼也

残娘小代と供小姓として西謝曰残つみをあはせめ
又父母愛憎とす。情別君をもて給ひ。まきあ
妻故而方護のすすり上等り。まちを終え加駕小乘
中行事敵裏一ツの祠より加馬と堂宇を卸し燈
立退之所の者拜し照る深夜よほんである旧暦集
事夥々小面に短刀を以て是を刺す。遂に殺を昭給
帰之事の次をも語る。又多び町中大恐れ人を候
備へす。止め坐も歎とあがむ。今ノ妻娘を前祖
祖と云ふ。證と見る。又國工通事を有あり
移し法傳等。まく改めて。まく

真鑑考。永正十三裸のうえ阿倍流下園民姓子孫り
後南部より坂崎氏復つた。號ひ下園家名。幕末不属家

回観の事を思ひて事行す。ある間そりと
立すじやあり。香前又山奥とのことを玉筋の父義村
の奥橋も一里半のまゝ事すゆく。今国防堂
主子がゐてゆゑで、御上りゆき。主をもてひきの人の
云々。其を與ふ事のものありける。と老うる。のうす
てを宣り在けたまひて。二五七周防堂の兼玉堂
ゆきと。そのうち。工了。鷹安の元氣をうかがひ
村老の住人。翁のまゝあしてゆく。ゆくを。あくまでも
うりと。應ゆのこゝれをも。作り。其の筆を
うろこを織の跡の如く。と。

此の郡記事考云天正ニあらずかあらえク
作例定あり
本邦經國ニ隠鼠トモアリ年形ニシテヨク走ルト
ニテ日本ニモ土佐國ナトニアリト日隨抄ト云等至ニ
見エヌタリ

とあり

又也著日隨抄、後代の住吉社ヨリ體變換シ

○湯守文村

大傳院

福字内
圓山草堂

山守り里事の序
本領地奉行基佐妙佛
社地 伊勢 不動 稲荷 麻師 義王釋迦

八幡

○温泉内村

湯ノ又ノ里北丁東之川東ノ又ノ流馬高(目川)

立原

社地 伊勢 不動 稲荷 麻師 義王釋迦

半郡上山河村ト赤須村西又松木(又)節基村
移長根半限(又)那達(又)立原

支御 小川村ニ温泉泉寺(又)華嚴の山(又)達(又)涌湯

力高
前章

西行銀山山程四里馬高目八二里半因入二言三亭

○中津又村

支鄉 金 曲言口極
七根書卷五
社地 之八幅 初音 川堤
十才子
戶村十才子給人 伊藤之助
詩書畫皆能

中澤不^トリ四里北^ノ、笠置山^ノ上^ル、一里下^リ、一里、嶺道^ノ
古^シ銅^ノ鏡^ヲ、二里下^リ、南^シ、中^ノ野^ノ、中^ノ原^ノ、
南^シ、中^ノ野^ノ、中^ノ原^ノ、支^シ弟^ノ、大^シ休^ミ、山^ノ林^ノ、車^ノ室^ノ
○沖田西村

皆川北より南へ流る。大原氏の本寺舊村主所仁川が賣
高次村にて大河にて至る。支郷大海村中村
社地観音 富倉山と子古社弘法大師の像作
福昌寺を守護する者も傳と収めし而爲也
里山門 伊勢 三井寺
福昌寺 福宗久保傳 大都迄山地隆財ニテ奉之
竹村の軒蓋忠左衛十ニ代つむ其祖と由馬姓
義和室公卿傳忠左衛門の孫也。後久保
久保田の少城の形善源の間田畠の復て移し復事
安門村と山城の峰山を主とすの御宅に主と四友
大徳寺西山の山門元燒毛文也呈印及御宿所等
之を勤め功を取る事多矣。

卷之三

獨鉛村

支那 向田 上野 沢日 諸 宮石 廣重
社地 大口経松云 繼體天皇神龜年中和顯
所賜吉文碑 普照元不滿四年而崩
作神龜二年四月二十六日堂塗立長保四年再
興和因城主藤原信繼此時其子神龜二年大康
二年別當第十二代大永二年南都と後判官信義
の爲小堂社破壊も御守備傳之在之の室
跡至了ハ後之御守備不全後之
後判官再建之又被後之寶鏡文十三
年十二月廿六日奉還大永二年
國府信頼六月廿四日性とあく高右京主印

別名を有する其子十事をもつて川の水を多用す
人完出を以て別名を有する川の水の跡強調す
オレ作と倍別名を有するはゆゑありて扇因
山井引あへ
之をもれは第 ほの筆者生の正月十二日
ノヨリナリ 別名十事 有り作
スの形 名稱有

續紀卷第二〇

文 **西** 天皇御世、五月庚辰、賜越後、蝦夷秋物、
各有差。○三月丁卯、越後國言疫、給藥救之。
壬寅、越後國蝦夷秋獻方物。○
丁未、令義後國修理石船柵。○夏四月己酉、
越後蝦夷一百六人賜爵有差。○己亥、令越後
佐渡二國修營石船柵。○**大寶元年**壬子、令筑
紫七國、及越後國間、點定女兵衛貢之。但陸
奥國勿貢。○大寶三年九月丙戌、**御多**上言、
新嘉州郡、許之。○寫入士、戊、陸奥、越後二國
蝦夷野性難馴、屢々害良民、乞遣都太輔正五位
紀勲佐伯宿禰石湯為征義後、蝦夷將軍、內備。

頭從彦年紀朝臣諸人爲副將軍出百面道征伐授
節刀年軍令○已卯遠江駿河甲斐常陸信濃上野陸
奥越前越中越後等國士兵征伐五年自己上者賜
復一年三月

嘉慶龜元年七月壬午元年九月丁酉以信濃
上野越前越後四國百姓一百戸配參相戶

後紀延暦十五年正月任官以從五位下越後守
佐天宿禰田村麻吉爲陸奥守行充一左模哉歲
守○隆平、永寶、世子行充、一左模哉歲
上總、常陸上野少佐、少佐越後守、國民九年
隆興國伊勢治城、下野道修いしててるえもん
○五十七年庚午秋後國米一萬二百斛佐渡
盟三十斛、每年出羽國雄勝城の鎮兵糧

○生田村とうだ

三河國生田村を額田郡太平と神塲崎の間に在り
じつ田の中うち生と極出する所と云ふ。片玉譜の
四卷より上州世良田小生田、隼人を主者とし代生田
村に住す。徳川家御由緒ありと、幸賀御禮
每年江戸へ出で、登義城のものと小判二両献上せり
舊禮字づくづく此隼人元は、一村の領主であ
りが儀式にて所領復び其の子百姓の福と有
る敵を夫故毎年始ふ加賀笠置の供奉上の少判を
一村の百姓是て勒め万介抱くを出でて主子保寧市
内被の名を披露せしめ旗本は生田年と云
人あり文書同事されば台令と云ふ。生田と正田と
山本とあらわすと云ふ。上州の生田氏と、三河生田
市と云ふ。その由来は上州の生田氏と、三河生田
市と云ふ。徳川家康より由緒ありと云ふ

○大戸村

中北手組

升村を櫻山の事より。郡邑記云大戸村大松澤の枝郷。享保丙午西秋田
郡横山村を境中山野中限御黒印給於云々見えず櫻山塚小行人冢と
云ふ。湯殿山一世別行の人物也。今、唐碑を地塚下寺の村の坂亭小
来由禪定門を有する名焉。天明の三歳近在村荒巻山多侈済人
老翁讀書。之の如也。どせ。それ。子。寺門氏と。その事。達
竹村佃耕い。地。篠竹の如切。小林の。雪かね。曲。竹と世理
籠。す。の。作。せり。こ。根。荷。送。す。第。し。と。あ。賣。擔。干。駄。ひ。
の。顔。ひ。て。肆。小。ち。の。う。お。商。筆。帝。筆。小。そ。の。り。よ。世。理。如。其。の。ホ。の。名。
平籠。大戸。筆。を。以。て。世。の。小。枝。村。易。下。村。上。村。塚。内。村。關。上。村。而。置。
○古柵の跡。塚内。古折。御。御。も。不。存。の。田。又。の。が。今。立。山。在。其。世。其。城。主。い。ま。此
じ。家。と。多く。五。月。音。忙。山。小。菖。蒲。憐。あ。事。と。お。そ。や。く。少。御。御。の。事。

川邊郡 大戸村一 中七夕下

能煩理山の名と云ふ事す。むろ、五月のあひ帳で高山主^{タケシマノミコト}より鑑
風^{カク}に御^{ミサハ}る。花^{ハナ}洞^{カニ}山^{ヤマ}御^{ミサハ}深^{タマ}山^{ヤマ}五^ゴ月^{イフツ}各^カ小^コ高^{タカ}め^{スル}、
山^{ヤマ}を^{シテ}隠^{ヒカク}御^{ミサハ}る。とすの事也。又山を^{シテ}之^{シテ}、媲美^{ヒミツ}詞^{シキ}を^{シテ}、前^{マハ}東^{ヒムカ}館^{カニ}
薬師^{ヤクシ}山^{ヤマ}を^{シテ}宇^{シテ}復^{ハシメテ}解^{ハシメテ}通^{ハシメテ}能^{ハシメテ}煩理^{ハシメテ}、^{シテ}夷^{ヨシ}言^{ハシメテ}む。地^{シテ}有^{ハシメテ}、
田^{タチ}留^リ山^{ヤマ}澤^{カニ}河^{カニ}と^{シテ}字^{シテ}小^コ彌^ミ久^{ヒロ}も^{シテ}有^{ハシメテ}。世^セ塙^{ツカニ}内^{シテ}、^{シテ}享^{ヒカル}保^{ヒカル}十七^{ナナ}年^{イフツ}壬^ジ子^コ
名^{シテ}也。鍊^{カツカツ}玉^{タマ}もの家^{カニ}の跡^{シテ}と^{シテ}接^{ハシメテ}れ、炭^{カーボン}の出^{ハシメテ}地^{シテ}あり。御^{ミサハ}社。
○豐受皇大神宮、八幡大神宮^{ハチバンタシマニカニ}、^{シテ}宣^{ヒカル}西^{ヒカル}の内^{シテ}、^{シテ}享^{ヒカル}保^{ヒカル}十七^{ナナ}年^{イフツ}壬^ジ子^コ
九^{クシ}月^{イフツ}再^{ハシメテ}建^{ハシメテ}別^{ハシメテ}當^{ハシメテ}道^{カニ}山^{ヤマ}清覺院^{キョウガクイニ}、^{シテ}清^{ヒカル}隆^{ヒカル}記^{ハシメテ}。棟^{ヒカル}札^{シテ}也。

○松淵稻荷明神社、松淵氏上祖^{アシカニシタチ}、父^{アシカニシタチ}、母^{アシカニシタチ}、松淵伊三郎正治、吾
家^{カニ}の山^{ヤマ}、父母^{アシカニシタチ}、^{シテ}御^{ミサハ}社^{シテ}あり。之^{シテ}付^{ハシメテ}、^{シテ}付^{ハシメテ}せ也。

○開上明神^{カミツカミ}、^{シテ}開屋^{カミツカミ}あり。しらもぬ^{シラモヌ}もかひ^{カヒ}はせり。其^{シテ}井^{カニ}塙^{ツカニ}の井^{カニ}、^{シテ}開^{ハシメテ}上^{ハシメテ}まわり。

字^{シテ}地^{カニ}正保^{ヒカル}三年^{サン}

妙^{ミヤウ}作^{ハシメテ}、^{シテ}草^{ハシメテ}、^{シテ}塙^{ツカニ}内^{シテ}、^{シテ}三^{ミツ}枝^{ハシメテ}田^{カニ}堤^{カニ}澤^{カニ}、^{シテ}大^{ヒカル}腸^{カニ}

○八幡村

舊勝跡

とく舊^{カニ}八幡^{ハチバン}の名^{シテ}と^{シテ}有^{ハシメテ}。源義家^{ヨシキ}將軍^{ヨウジン}、東^{ヒカル}夏^{ヒカル}征伐^{ヒカル}終^{ヒカル}也。
世^セ神^{ミサハ}小^コ祈^{ハシメテ}、^{シテ}極^{ハシメテ}かひ^{ハシメテ}しゆう^{ハシメテ}鑑^{ハシメテ}ひ^{ハシメテ}。近^{ハシメテ}也。壬^ジ子^コ白^{ヒラ}子^{ヒラ}河^{カニ}内^{シテ}守^{ハシメテ}
藤原文平^{フジワラモノヒコ}、神田二十解^{ミタカセ}を^{シテ}寄^{ハシメテ}也。又、正德^{ヒカル}三年^{サン}奉^{ハシメテ}加^{ハシメテ}帳^{カウ}貢^{ハシメテ}、
別^{ハシメテ}當^{ハシメテ}和^{ハシメテ}光^{ヒカル}坊^{カウ}と^{シテ}有^{ハシメテ}。今^{ハシメテ}の別^{ハシメテ}當^{ハシメテ}大^{ヒカル}久^{ヒカル}保^{ヒカル}村^{カニ}、革^{カニ}藏^{カニ}院^{カニ}、^{シテ}之^{シテ}、
山^{ヤマ}社^{シテ}ある。もともと^{シテ}や^{ハシメテ}居^{ハシメテ}と^{シテ}有^{ハシメテ}。本^{ハシメテ}社^{シテ}の北^{ヒカル}不^{ハシメテ}萬^{ヒカル}社^{シテ}也。又^{シテ}そ^{シテ}
白^{ヒラ}子^{ヒラ}と^{シテ}守^{ハシメテ}。今^{ハシメテ}の地^{カニ}、^{シテ}城^{カニ}、^{シテ}古^{ヒカル}城^{カニ}蹟^{シテ}有^{ハシメテ}。そ^{シテ}
文^{ヒカル}率^{ハシメテ}と^{シテ}守^{ハシメテ}。

○白^{ヒラ}子^{ヒラ}河^{カニ}、^{シテ}う^{シテ}目^{ハシメテ}、^{シテ}河^{カニ}鹿^{カニ}裏^{カニ}御^{ミサハ}川^{カニ}の裏^{カニ}也。

○京^{カニ}塙^{ツカニ}神^{ミサハ}明^{ヒカル}宮^{カニ}八^{ヒカル}幡^{カニ}村^{カニ}也。

○白^{ヒラ}子^{ヒラ}山^{ヤマ}應^{ハシメテ}現^{ハシメテ}寺^{シテ}普^{ハシメテ}門^{カニ}院^{カニ}、^{シテ}歲^{ヒカル}那^{ヒカル}增^{ハシメテ}日^{ヒカル}古^{ヒカル}を^{シテ}真^{ハシメテ}三^{ミツ}今^{ハシメテ}禪^{カニ}林^{カニ}也。
開^{ハシメテ}山^{カニ}滿^{ハシメテ}福^{カニ}寺^{シテ}七^{ヒカル}世^{ヒカル}玄^{ヒカル}的^{ヒカル}和^{ヒカル}、^{シテ}妙^{ミヤウ}寺^{シテ}天^{ヒカル}文^{ヒカル}十五^{ヒカル}年^{イフツ}頃^{ハシメテ}、^{シテ}普^{ハシメテ}門^{カニ}山^{ヤマ}慈^{ヒカル}眼^{カニ}寺^{シテ}也。

山號赤壁号改是十九世當住怡峯年和尚之白子向內守藤原季年
碑文已珠院殿玄應宗耕大居士

二十一

社地。伊勢。天神。十五

卷之二

大和の御子。白姓長久。やひう先生古事記不二。

卷之三

弘明集

比華原

胡

重刊院次
二年

徐陵
宋書

アナ

卷八

三

四月廿三日
寺本尊、弘泡行基作。南都保母子病夫之
妻之贋是。左の多袖扇の破手の御衣。

既來の事も未だ知らず

支郷 中嶋 一日市村

蒲沼

花巻山石頭寺 清淨寺

補陀寺

三浦五郎丸

青原寺

花山院庵心公居士

若宮の物と申す

和宣石頭寺の山なりを有り程程の中

青原石頭の所と申す之今也口

支郷

○和田妹川村

濱村 山根 高田

智田 拔下

家屋 田中

羽立 玉鹿

延命地

日本三財

雲像

伊舞社

誦方社

想音

尊勝院真言文傳寶鏡洗寺

本子不動住蓮華院

藏前尾館

山巡見使ひに舊通じむる三浦

兵庫五郎其と夫人もかとよ
雪詠ひし山翁あり就景尾羽と葉度
就りしすありもとまつてすりてす

鬼王館

中牟鬼の城

○飯塙村 金山より下也

古郷 国後保打
御中守廻 観音

伊勢社 保呂母社 三幕四社

門間 古口二郎ト子の元士家主・御村開翁也。
住居を替へて十九代肝煎一村主と奉事する。
上祖より譲り拂れあり一代を一度見之
他人ヨリ承示ス七ミロ絶句ノ詩有リシ印
アリトテラスセシニ画の布傳の拂れあり
美苗云 通後地山石あり子時布袋の拂れマテラモ也
終ヘテ後十才國大和・信オクトモリ

古郷 朝ミアラ

藤原姓小野寺氏並枝流系譜

大義冠織足

天兒屋根命二千代御食鄉

正三位

天寶八年十月卒官薨五十二歳

多岐峯

織足男母・東府國子君也右大臣・延二位
不比等

養老四年三月三日薨享年三十歲

房前 不比等二男母・鰐我入鹿也中衛大將氏長者

延三位天寶九年四月十七日薨享年七

奥名

房前三男左大臣三位延慶三年七月廿日薨享年二十二歳于河邊左大臣

藤茂

奥名五重從四位下伊豫守

豊澤

從四位上備前守母高野吏人高森俊女
佐五位上河内守母島取豊俊女

村旌

母下野大掾鹿嶋女之鎮守府軍從五位上
武藏守宇依藤太也美平年中與平貞盛
而將賜院宣平時門追討也

秀卿

秀卿四男鎮守府軍從五位下下野守母
源通女号小山殿應和二年十月卒

公光

寛弘四年七月廿八日卒

知常

秀卿四男鎮守府軍從五位下下野守母
源通女号小山殿應和二年十月卒

公卿

肩藤相右馬太夫

脩行

近藤祖 太郎

公任

武藏祖 小太郎

公脩

佐藤祖

公脩

尾藤祖

公停

相模守長元三年四月五日卒

公休

公休

公方

公方

經範

佐伯祖

佐秀

經秀 康平四年卒

公經
資員清

須藤祖 传通尚
資房 那須祖

秀遠

從五位下形部大夫
應德三年卒

遠義

佐藤英後守
永久二年卒

女子

源氏朝室

義通

波多志荒後守

秀高

山城守

有經

古馬允

義景

大友五郎

義寬

下野國佐野庄小野守知行初在名少卿主之次上左

道綱

小野守禪師太郎治承元年高倉宮御謀

道時

小野守六郎

元豐元年豆三丹於箱根源賴朝卿入見孝子時足利忠綱上同宇治川先陳之孝子承
建久八年三月廿三日卒法名曉照院

小寺寺碑文

重道

慈大命後下總守下總國大泉庄領
建保六年卒法名道榮不字源平
等尼律師母長治宗女

秀道

大泉六郎下總守仁治三年八日
九日卒法名定第院母結城朝茂母

源多加出之幸永平幸且家子戒名元道元教授衣

義重

源多出雲守源國印名代
建七午年卒平泉寺道元受戒

經道

小寺寺六郎虫守實三郎
恭村二男後大泉ヨリ那丹雄勝郡

稻庭ニ移住

文永十三年閏八月吉日

卒道号寂然六十二歲

忠道
道直

孫次郎 中務太夫 仁元年
四月七日依地震年四十五歲法名道銀
西馬音内

道定

湯澤三郎

通有 小野寺源太郎 譚正少弼
雅勝平康仙北三郡庄主十
德合二年六月二日卒三十九歲法名

見星院

信道

孫次郎 遠江守寔道有不
兄玄有無一子故繼其家 法名道銀

女子 高井十郎室
道政 本堂駿河守

高道 孫次郎 右京亮

正慶二年 小田原一戰時討取
長谷郡 貞治二年 幸清号
自照庵七平一歲

道勝 戸澤因懶字
道珍 神宮寺藤七

時道 孫八 宮内太輔

應永五年 仙北移官建小荒神
慶二年 正月八日卒道号道昇
母 伴綱忠女

道當 萬倉被登守

道守 植口房五郎

春道 猪八早世

春光 雜名郎 吉蕃頭

至德三年 矢嶋光晴一戰時玉米郎

切取應永古年六月廿二日平五十六歲
墓所立者之年

氏道 藤太郎從五位下駿河守

應永三十二年四月廿二日卒

六十歲臣名道儀

道榮 駿州今川家榮幸
女子、秋田城介室

氏綱

因惣守 実氏道弟係無一子焉

二康正元年卒七十一年

恭通

源次郎

中務太夫

長福二年秋田恭賴下兩人南部
三部屬幕下也。其後家臣伏原式
都少輔忠經以智謀實正二年四月
應仁二年七月四日間南朝侍臣
終寺勝再居仙北本城文明九年十二
月六日卒七十五岁大教院

女子 田村佐弓室

景道

源次郎

玄蕃頭

明應四年常州小田合戰而加勢
討死四十七歲

晴通

善吉次郎

中務大夫

景道不有故，繼其家後入道。
号石舟角。永正十三年十二月廿二日卒。
六十六歲。遺言。輪林院。

道周 鍋倉岩見守

通高 大森長門守

道満 小村了善吉次郎

道廣 稲庭館三郎

道實

三梨善吉節
永正十三年四月吉日平四十二歲
名道勤

攝津守

道親

藤井源尉
天文十五年七月廿日卒
名道順

道幸

善四郎 揭津守
天文十三年二月廿七日卒年三十八歲

道經

大半道年七十子實夏稻庭二男其後
道來實子出來及七郎守人

道嗣

藤井衛道來及實子
元和四年二月廿日卒年七十五歲

道寬

三梨藤井新川連道度次男
正保頃卒

重朝

達谷

女子

道興 三梨

川達善二郎

彈正

道俊

弘治三年十月大七日卒年六十三歲
法名淨念

彈正

道光

彈正 懷唐守
大永三年十一月九日卒年
鑑名淨樂

道度

傳十郎 天正十年四月十日卒
四十五歲

道種

伊千郎 懷慶守
寶永十二年七月二十日卒年

道寬 三梨 各代

女子 西鳥音内室

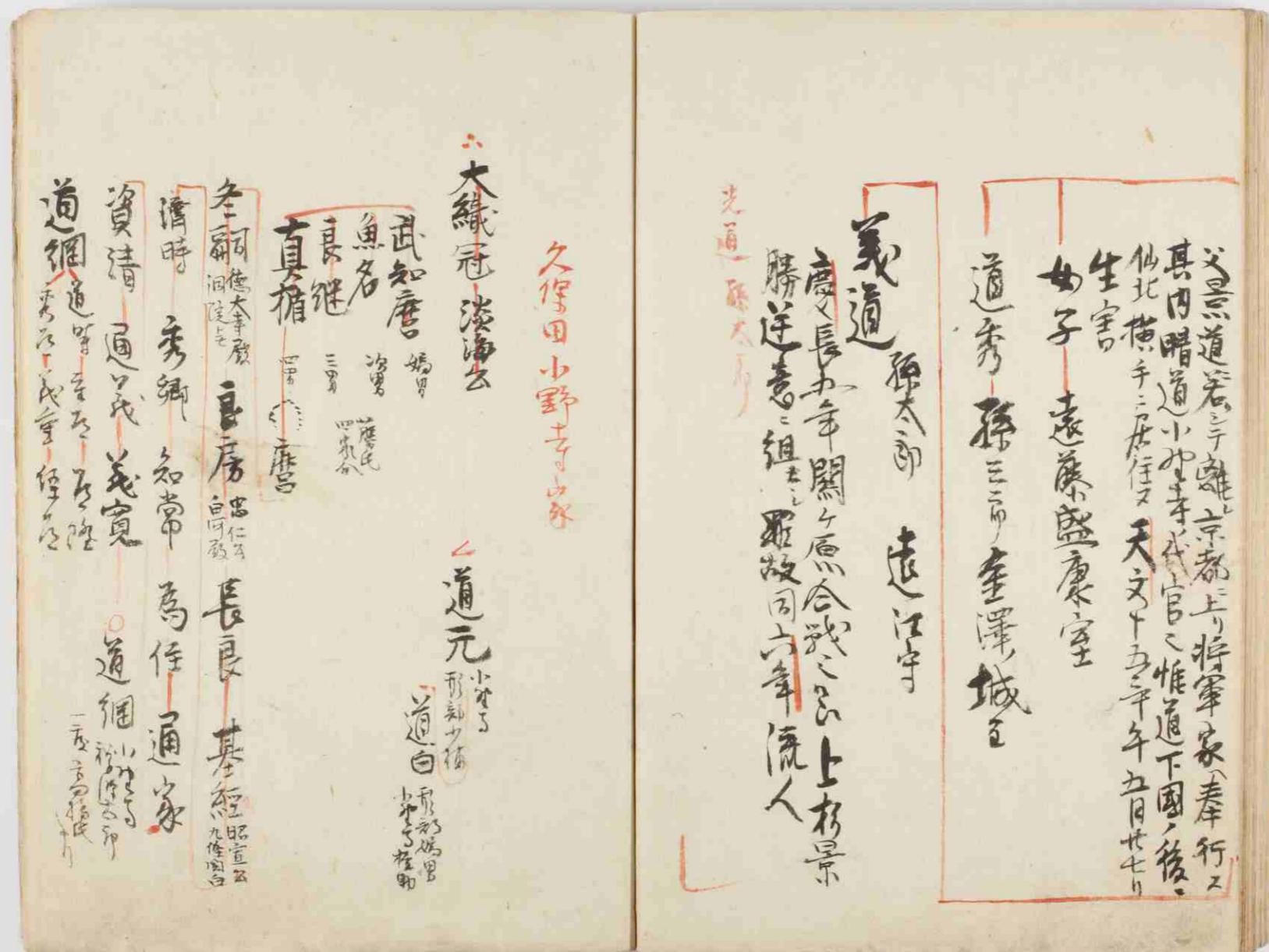
道行

伊千郎 角左衛門
萬木殿奉行 大
宣文三年正月九日卒年

道孝

妙子瀬谷一胤室

雅道 中官亮



廢釋記四卷衰名田發謀數條去程
八月十七日御鑿足禮成御供被申衆三福此左衛門大夫細川
越中守源左京太夫里田忠守藤堂佐佐守加藤在直
助也坐不參二面騎射于殿之押被下七月三日大破名祐
下軍七内度下路小山城入築上石路動事軍不
見今度六人多り以使者由度被帶け治部少佐軍
近江五縣の間兵士席坐軍の兩道を差遣寒由立
内府御敵攻登支陣一ノ戸大納言忠重一万卒
全歸上而車下東山道を參里後元中折處在九
杰の押陣百餘尾兵部少、同後減小其勢三千餘
兵云之關原合戰之日、度長五年甲子九月四日
洲侯先降加藤左馬助、源左京大夫本多美濃守、川原

閩東敵子駕向石田方少主
前中納言淳因中納言伊吹文津守津之原

卷之三

済民不也希有其者、維摩經不也常不希有希見也
又曰、日不照也、訓也。○陰陽小無也、中也。又
曰、日不照也、考義也。○中也。

又
解

平家物語と馬鹿の物語とで芥子とお絵かきの物語と
がて盛衰記とてうなづけられたり今はうな草履の
全形が判ふ僕人ど譲りて下に持ててゐるといふ

計巨四
太常金

浦宇多の御刪削用毛筆又紙と此の鑄造
新様字鏡と鉛又銅を細々と刻むる機の事。

梅中華の事に付けては、此の御用事は、御内閣の事務局をもつて、うなづいてゐる。

けとどき

漢書平陽侯頃風也嘗與人化鷙號之比名也元南
音之蓋用子之子

瞻餌難錄于匾而下之。西域記上屈支國其俗生子以木柙
頭缺其齒而使之入賊法頭也。增鏡小大改大臣藤公相嘗有
區短也。伏術者其首之肉事之發物也。莽之傳之燭之燭多首
所之也。○
江次年小羞着物署月削冰甘飴等著首當上者熟之
加削木刻見焉引及日者月加之名為松草飯也。以代熟食
之。又以刀切之暑者熟于損其皮。○博物志上削冰令
圓拳以向日炎蒸其影則有火而生之。

六月後の文富仕事盡るゝなり人少々亡て病死
も多矣也又八唐の不遇も甚也其妻盡妻とゆふべり更子

指南小造富の捕鬼傳言曰此と云ふ大袖蛇の頭と云
也賊盜律の注云鹽毒を以てたゞもすきゆう
左字と云ひ推定する據ても日本望異事と云う
入が切とせや多しと云ふ事や云々云々云々
けもく
矣ふる快樂のものと太平記より夢中の快樂とぞと聲
。けりく演紀宣年と謀家事とぞとくとくの快樂
のものと云ふ。けりく
外居の多岐へ砂石集の御ひつまつまづかひて入聲
即ひのまの内よおもとどき
けりく
氣歎事と云ひ傳言アーティス

○水母
久喜が水母の名を云ひ節ある色アリと云皆有
あり丹後宮津浦の所ハ珍らしく食用とする
御子云々柳子云々又肥前アリナリと云
奇一肉百子一

○久喜
幸之の者積と稱す。庫裡の唐者として書言故事捕
厨二日者積と厨二日者

久喜と云はれども日本紀に之名をとく
岩出明と云ふ者御事主と云ふ者と云ふ者と云
又曰直澄彦駿河をも爲も

黒色の水滴くろしきのすいとありやうともあそひのまへ

雲くも涌よきたり、仙せん道どう親王しんゆう傍わき國こくの神かみの文ふみ子こ、はら行おこ政せい始はじめて三さん涌よきたりの龍りゆう膽たん立たつ、はら行おこ物もの用もち、はら行おこ三さん涌よきたりの類るい裏うら雜ざら芳こう上じょう建たて浦うら玉たま透とお經き物もの。

琥珀こはく手て餅もち腰こし、油あぶら腰こし、はら作つく腰こし
黒くろ漆うるし手て餅もち腰こし、黑くろ色いろ腰こし

傳名つたな輝てる朱しゆ、入いりて名な神かみ福ふく、はら重おもみ
今いま此こ木き井い、はら移いは草くさ、はら移いは革かわ、はら重おもみ
又また繩なわ、はら重おもし、はら重おもし莫まれ霞かす。

本ほん毗び那な夜よ伽が譯いつ絆障ばんじょう碍い神かみ、はら如ご荒あら神かみ

鹿しか乱ま荒あら神かみ、忿おこ忿おこ荒あら神かみ、三さん身み、はら三さん寶ぼう荒あら神かみ、はら三さん障さう碍い。

酒さけ豆豆男男神かみ室むろ御ご酒さけ造つくり神かみ也や酒さけ殊こと三さん神かみ。

白しら御ご酒さけ造つくり神かみ也や酒さけ殊こと三さん神かみ。

麥むぎ奴やつ、はら黑くろ穂ほ、はら豆まめ、はら豆まめ、はら行おこ言こと行おこ。

魚うお名な解わか、はら射の鳥とり矢や、はら名な水みず。

おとよ月の物事の意をせしゆくがおつと申せ
うぐと陽うてすきの上総の坂下の宿まへ
真邊寺跡あく
やま前りやシロシとて引く
まへ

延喜式上摺栗子扁栗子燭栗子前栗子
子の目次 扇事本今め手事アタシ一類栗義
栗子捲栗子。九月九日栗子子の熙朝半
姓子事行竹子とく。子及う。
藻井の部語ふ。今也て人間が多きもんを生る已矣

美文と申す馬と一乗と申御るを申す
吉良馬と申御るを申す

改姓之奉名戶之祖神
○延祐政和一枝繁

漱石の文庫を以て、其の著書をも漱石美術大會細々
集韻化人等水泡の漱石と云ふ或ぬすり
陸手の事可也

朱草事多矣

破損あり

